

資本主義社会と武家社会

前回『貨幣経済と武士』でも書いたように、現在の暦で1月30日が赤穂浪士の吉良邸討ち入りの実行日に当たる。

この討ち入りの真の目的は、主君の恨みを晴らすためよりも、自分達の再就職に向けての集団アピールであったとの説がある。

現在のサラリーマンにおいても失職後の好条件での再就職は非常に難しく、これは江戸時代の武士階級においても変わらない。

現在のサラリーマンが会社が潰れて失職する事を恐れるように、江戸時代の武士も藩が潰れて浪人と成る事を最も恐れていた。

資本主義社会の現在では会社が倒産する原因は、経営不振で赤字が続き主力銀行が手を引く事であるが、武士社会は資本主義社会では無い。いくら借金を積み重ねて返済不能となっても藩が潰れることは無い。

返済不能で新たな借金が困難となっても、藩の運営が厳しくなるだけで、藩は潰れない。最低限毎年米だけは入ってくる。

それでは、どういう時に藩が潰れるかと言うと、それは跡取りの男子がいなくなった時である。

現在において、会社の社長が仕事に全く興味を示さず、受付のおネーチャンや美人秘書とイチャイチャしていたら社員はウチの会社は大丈夫か？と不安になるが、江戸時代では藩主が女に全く興味を示さず、政務に打ち込んでいるとウチの藩は大丈夫か？と不安を感じた事だろう。

藩の運営は自分達優秀な官僚がいれば大丈夫だから、藩主は子作りに励んで貰いたいと願ったことだろう。

中国を初めとして韓国や日本でも男子が家の跡を継ぐと言う考え方は根強く、男の子を希望する家庭は多い。これは、現在の天皇家の存続問題に関しても影響を与えている。

跡取り息子がいない藩では他家から男子を養子に迎え、次の藩主とした。

しかし、この養子取りも大きな問題を抱えている。

子供を得る目途が立たず、養子を迎えて、次の体制を準備し終えた段階で、まさかの男子が生まれてしまった場合、次期体制で主流となれなかった勢力が新しく生まれた子を担ぎ上げて主流を奪還しようとする。一方次期体制で主流となることになっていた連中は自分達の地位を守るためこれに対抗しようとする。

その結果お家騒動と呼ばれる抗争に発展することになる。

この事態を避けるためには、藩主の死ぬ間際、又は、死後養子を迎えるのが一番良いことになる。これを末期養子という。

しかし、江戸時代初期には末期養子は禁止されていた。そのため多くの藩がお家断絶となり、失職武士（浪人）が、溢れかえることになった。

現在では婚姻は一夫一婦制であるが、江戸時代は正室と側室のように複数の夫人を持つことが普通であった。

これは跡取りの男子を絶やさないための工夫であった。

映画『超高速!参勤交代』の中で、佐々木蔵之介が演じる湯長谷藩主の内藤政醇（ストーリーはフィクションであるが、実在した藩で実在した藩主である）が、正室と側室を持つことを宣言するシーンが在ったと思うが、藩主といえども勝手に側室を持つことは出来ない。側室を持つためには正室の許可が必要なのだ。

「貴方、側室をお持ちなさいよ。」と、正室の方から藩主に進言する訳だ。

何故、嫉妬心を押殺して、このように勧めるのかと言うと、跡継ぎの男子がいなければお家は断絶する。お家が断絶して藩が無くなれば困るのは自分も同じだからだ。

跡継ぎの男子がいなければ、側室に産んで貰いたい。医療体制が不十分な時代で、成人する前に死亡する事もよくあるから男子一人では心許ない。出来れば何人も男子を欲しい。現在と比較して女性の立場は非常に弱かったとは言え、正室としての地位は不動のものであり、たとえ側室が世継ぎの子を産んでも正室としての自分の地位は1ミリも動く物では無い。

正室の許可の無い女性との交接はお手付き（浮気）であって、側室では無い。

江戸幕府二代将軍の徳川秀忠の正室であるお江（淀君の妹）は、たいへんな嬪天下であり、生涯秀忠に側室を持つことを許さなかった。

その小心な秀忠が怖いお江さんの目を盗んで生涯に一度、大奥の女中と浮気をして男子を持った事が在る。

これが、側室であれば、その子は徳川を名乗り次の将軍の候補に成り得たのであるが、なにしろ浮気であるから、産まれた子は直ぐに保科家に引き取られ、保科正之の名で成人することになる。

三代将軍と成った家光は、自分には腹違いの弟がいるとの噂を聞いて、会ってみたいとなった。そして、面会した正之をたいそう気に入り、松平の姓を名乗ることを許し（徳川では無い）、会津松平家の始祖となった。

家光の好意に感激した保科正之は、代々徳川家に忠勤を励むことを家訓とした。

この家訓が、幕末期の会津藩の悲劇に繋がっていく訳であるが、これに関しては又別に書くことがあるかも知れない。